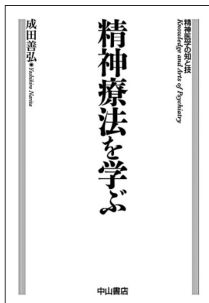


■ 書 評



精神医学の知と技 — 精神療法を学ぶ

成田善弘 著
中山書店 2011年11月
220頁, 定価 3,360円

著者は、青年期境界例や強迫性障害の精神療法についての著作や、数多くの精神分析関連の翻訳でも有名な、わが国を代表する精神療法家の1人である。このほど臨床の直接場面から離れることをきっかけに、著者がこれまで精神療法で学び実践してきた道を、あとに続く人々を対象として語っているのが本書である。著者は今まで教育分析は受けたことがなく、基本的には自己学習の中から自分の精神療法を確立したとのことである。そのためか、著者の精神療法は精神分析的手法に基づくものでありながら、専門的で抽象的すぎる概念や教条的な言説はほとんどみられない。著者が学会や大学で行った発表や講演記録をもとに執筆されたこともあって、平易でありながら含みのある読み物となっている。

全体はページ数の多少はあるものの、7章に分かれている。第1章は「精神療法をどう学ぶか」と題されている。精神療法家を目指すときの動機、文献や書物からの学び、翻訳の仕事、ケースカンファランス・スーパービジョン・教育分析からの学び、師からの学び、論文を書く、患者から学ぶというテーマに沿って順に書かれている。この並びを見るだけでわかるように、精神療法を学び、精神療法家として育っていくときに留意すべき点が、著者の経験をもとにやわらかく語られている。第2章と第3章は、それぞれ「強迫性障害との関わり」、「境界例との関わり」となっていて、著者が若手の精神科医であったときの治療記録から、どのように自ら学んでいったかの軌跡をたどることができる。著者は総合病院の精神科医としても活躍し、そのとき行ったコンサ

ルテーション・リエゾン精神医学の経験が、第4章に書かれている。「節度をもった脇役として働くことによって、対象に大きな変化を引き起こすことができる」と述べ、病院内リエゾン活動と個人精神療法の類似点が指摘される。今なお総合病院内で多職種に囲まれた中での精神科医のあり方は変わっていないであろう。第5章以降は、指導する側に回った精神療法家としての立場で書かれている。第5章「力動的な精神療法の中で治療者は何をするか」では、細やかな配慮に立った上での面接の開始から終わりまでが記述され、第6章は「スーパービジョンについて」と題されて、著者なりのスーパービジョンの方法が語られる。ここで語られる、スーパーバイズをする側とされる側の関係性は、読むだけでははらするような転移を巡るやりとりもあり、痛々しいほどの内省も含まれている。人の心を扱う職業の厳しさ故であろう。評者は、精神科医になりたてのころ上級医師からスーパーバイズを不定期に受けただけで、精神療法を系統的に学ぶことはなかった。この点は評者の負い目の1つになっているのであるが、最近の精神科医の初期教育ではどうなっているのだろうか。本書を読んでふと気になったことの1つである。そして最後の第7章は「精神療法と日本語」と題され、日本語のもつ主語の曖昧さや言葉の「他者性」が語られる。

評者は1日1章ごととゆっくりと読み通していった。段落ごとに目を本から離し、自分のつたない経験と照合したり、言葉の奥にある深い人間的な洞察に共感したりしながら文章を味わった。精神療法を学ぼうとする人たち、あるいは現在自己流ではあっても何らかの精神療法を行っている人たちのために、一つ一つのコメントは具体的な指針となるであろう。またそれだけでなく、著者の自分史でもある本書を読み終えることによって、1人の精神療法家の心の軌跡もたどることができる。平易な日本語で書かれており、読みくたびれてしまうような長編でもない。時間のあるときに少しずつ読み続けていくだけで、多少とも雑になりがちな日常臨床への反省がぼつぼつと湧いてくる。患者の心を理解し共に歩みながら考えていくという精神医療の基本を、初心に帰って考えさせられる本である。(仙波純一)